

# 新しき潮干の遊び

三三

女高師 平 島 權 藏

一年の中で海水落差の最も甚しいのは、月齡三月三日か四日で其れを大潮といひ何れの海岸も、徒歩に船に嘸かし賑ふ事でありませう。

然し普通潮干狩といふのは、蛤、アサリなどの食用貝類を探るのを目的とするので在ますが、私には他の方面から小供中心に興味的に是れを行ひたいと思ひます。何れの海岸でも略同様とは思はれますが、私は毎年此頃に江の島から七里ヶ濱の邊に行きますから此方面の御話を致ませう。

此邊の潮干は本曆に記して在る時間よりは約一時間位早いので在ます、其潮干の時間よりも猶一時間も前に到着する様に、江の島の裏の岩の上を下り立つ様な豫定で参ります。此岩は蠣殻が在り

ますから其で足を傷めぬ様に足袋と草履の用意が肝要で在ります。

平常は干潮時でも水中に在るものが此日だけは水の外に出で居ります。干残された水の中や岩の上を其處此處と漁り歩くと、今迄は唯の岩と見へたものが殆ど生物で覆ひ盡れて居ると言つても善ひ位に種々の動物が其表面に付着して居ます。

海藻の類では、緑色のアヲノリ（細い絲の様なもの）アヲサ（廣い幅のもの）アナアヲサ（幅廣くして穴の在るもの）褐色のウミウチハ（團扇といふよりは扇子の様なもの）ウミトラノヲ（虎の尾の意味）などは浅い水の中に其れく群をなして蕃殖して居ます。是等ものに注意して居ますと次

第く／＼に眼慣れて来て岩と同色の小さな動物などが段々と見える様になります。其所には、種々の色美しいイソギンチャクが水の中では花の咲いた様に觸手を擴げて居ます、靜に指先を其中心に觸れると口からも觸手の先端からも噴水の様に水を吹き出すと同時に指先きに軽い刺撃をざら／＼と感ずる。然し是れが彼れの餌食となる小魚などの爲めには、強く烈しく感せしめ其動物を弱らして靜かに食するので在ります。

イソギンチャクを傷けぬ様に採り海水に生かして持歸ると飼つて置く事が出來ります。其場合には動物の割合に器は成る可く大きいのが宜しい、それは金魚などを飼ふ時でも同じ事で器が小さいと水に溶け込んだ空氣の量が少ないので早く呼吸が苦しくなるので在ります。私も三崎から採つて來て震災前迄六年間飼つて置いたのが在りました、食物はアサリの生肉をピンセットで口に押込でやり

ますと段々と消化して任舞ますが、翌日には其れが濁る是れは排泄物の爲なので其儘に置けば動物が弱りますから水を取換へてやる其爲め海水を用意して置かねばなりません。

稀には此所でも得られませんが稻毛の海岸で無數に居たのを見た事が在ります。其れはイソギンチャクとヤドリカリとの其棲で小さな圓徑二分か三分位のイソギンチャクが小さな貝殻の外に付着して居る殻の中にも又其れ相應のヤドリカリが棲んで居ります。小さな明き壘に海水と共に入れて持歸りましたが二日位で死んで仕舞ました。其れは、活動烈しきヤドリカリが前に死にイソギンチャクも續て死んだので在ります。かつて三崎の實驗所で「アダムシア」といふイソギンチャクの共棲せるものを「アクアリウム」の中に入れ貝殻から取離しヤドリカリと別々にして置くと一夜の中に又元の通りに付着して居りました。更に取離した二動物を硝

子板で隔て、數日置くと兩方共に悶々たる在様で死んで仕舞た事が在ます。是等の動物は其棲でなければ活き得られぬので在ませう。

岩に付着した貝の種類も澤山に在ります。全く岩の様でよく注意しなければ見分けの出来ぬものは、ヨメガサラの類で在ませう。ヨメガサラとは總名で皿の様な一枚貝で在りますが、一般に殻頂に當る所が尖つて居て逆も皿の様に据りよくはない何か容れ、ばこぼれて仕舞ふ、其故にヨメガサラといふのだとの事でありすが、私はヨメガサラといふのは鼠(鼠のことをヨメといひまます)の皿即ち小さな皿と解釋します此類には種類がかなりあつて其形から名づけウノアシ、ツタノハ、マツバガヒまたウシノツメ、キノノハナガヒ、キノズメなどいふのがあります。

サマエによく似た貝で米粒の様に小さいのが礫か砂の様に岩に付着して居ます是れが、タマキビ

其れから同じ軟體動物ではあるが貝類とは違つて體に八枚の背板を持ち岩から離すと老人の腰の様にぐるりと曲る、ダイガセまたの名をヒザラガ、是と同じので其體の兩側邊に毛の塊りが辨慶のジュズカケの様に並んで居るケハダヒザラガ其れから八枚の背板が肉の中に埋まつて僅かに外から見ゆるキートネルスなども此類であります。

潜水夫が頻りに潜らしてくれと勸めます是に「龍宮の松」を取れといひますと珊瑚の類でゴルゴニア和名をやぎといふ其れはく、美しひ赤、橙黄、桃、紫など色美しいのを海中から取つて來ます。

是れを岩の水溜りの中に入れて置き暫くすると珊瑚蟲が花の様に觸手を伸ばします此類の觸手はインギンチャクとは違つて八本であり一本くは鳥の羽の様になつて居ます、其昔し動植物を初めて分類した人が植物の部類に入れたのも無理はな

く。地中海の臨海實驗所で花と見た其れが物を喰べたのを見ては愕いた事でありませう此面白いものを小供に見せただけでも潮干の一日の遊びには新しい意味がありませう。

其ばかりでなく歸途は七里濱に出で、貝殻を拾ひかけらでなく小さくとも完全なものを拾ひまた紅、緑、褐色様々形種々の海藻を拾ひ油紙に包んで持歸り淡水で鹽ぬきをして畫用紙に載せ布片に挟んで新聞紙の間に入れ軽く押しをかけて置く此新聞紙を毎日取換へると數日で美しい標本が出来ます是等のものを其途の人に名稱を聞きなごすれば又限りなき興味もあませう。

どうか一般の人達の向ふ潮干狩の場所とは方向を換へて此新しき然も趣味多き潮干の遊びを可愛らしき御兒様方に試みられん事を心ある御婦人に御勧め致します。

